

SWITCH

MAGAZINE FOR THE NEW-JOURNALIST

保存版! あの幻の写真集の撮影全カット一挙掲載

特集

荒木経惟のたのしい写真術

📷 ホンマタカシのアラキー・ワークショップ13講座

佐内正史 宇壽山貴久子 保坂健二郎 野口里佳
末井昭 南後由和 水野祐 大橋仁 レム・コールハース
HIROMIX 操上和美 ユルゲン・テラー しまおまほ
ロバート・フランク Books and Films 1947-2014 in Munich

荒木経惟 [病室日記 2014.11.21-12.2]

『センチメンタルな旅』コンタクトプリント全18枚

2

浅田舞 海の神秘に触れて

水上から、海の世界へ。フィギュアスケーターの浅田舞が、近年、海とダイビングの魅力に心を奪われているという。あたらしく“発見”した神秘的な世界への想いと、そこから彼女の中に生まれた環境への切なる願いを訊いた

PHOTOGRAPHY: SHIMAMOTO MARISA
STYLING: FUJISAWA MASAMI TEXT: UCHIDA MASAKI
協力: しながわ水族館

カラフルな海の中に 未知の世界があった

この日の撮影は都内の水族館で行われた。浅田舞は水槽の中を泳ぎ回る魚たちを目で追う。その笑顔は絶えない。その想いは、東京から遠く離れた海へと続いていた。「潜るようになってから、海という場所に対して、戻るに似た気持ちを感じるようになりました」
現在二十六歳。フィギュアスケーターであり、現在はスポーツキャスターを中心に活躍中の浅田がスキューバダイビングのライセンスを取得したのは二十歳の時。そのきっかけは、仕事で訪れた沖

縄の海だったという。「実は私、いまでもカナヅチなんですよ(笑)。でも、不思議なことに怖さは全く感じませんでした。目の前に広がる初めて見る世界に、ただただ感動と感激の連続でした」

彼女は小学二年生からフィギュアスケートを始め、そこに青春のほとんどを費やしてきた。「私は、嬉しかったことも、悲しかったことも、悔しかったことも、全て氷の上で経験してきました。二十歳を過ぎた頃にフィギュアの現役を退き、スポーツキャスターをはじめとする仕事に就いてからは、毎日が新しい感動と出会いの連続でした。そこにもうひとつ加わったのが、ダイビングでした。海の中にこれほど素敵な世界があったことに驚きました」

海の中では「空を飛んでいるような、無の感覚」だと浅田は笑う。自分自身で体験したからこそ、得られる感動や想いがある。「海の中に、暗い、というイメージを持つている方も多いのですが、実はものすごくカラフルな世界。水やお魚はもちろん、海の中から見上げる太陽から、自分の呼吸で生まれる泡まで、海の中では何もかもが神秘的に映ります。だからこそ、この世界を汚したくないと強く思うようになりました」

海を知ることから環境への意識が目覚めた時、彼女は海の「ゴミ」について気が付いた。

「残念ですが海水浴場だけではなく、海の底にも落ちていくんです」

コンブやサンゴを再生する 鉄鋼スラグの不思議

今夏、浅田は青森県・下北半島に位置する風間浦村易国間の海に潜った。そこは製鉄の過程で生まれる副産物、鉄鋼スラグと腐植土の混合物である「ビバリー@ユニット」によって再生した海藻の森だった。

「二メートルものコンブがジャングルのように生い茂っていたので最初はちよつと怖かったくらいです(笑)。でも少し離れて、鉄鋼スラグの影響が及ばないスポットを見ると、コンブどころか、枯れた世界が広がっていたのです」

易国間の海に、磯焼けが広がったのは昭和五〇年代だった。水質/水温の変化やウニがコンブを食べてしまう、食害によって、この地の水産を担うコンブがダメージを受けたのである。

「ウニがコンブを食べることも易国間を訪れて初めて知りました。食べるコンブが減少したせいで、身の無い、食べられないウニがたくさん生まれたのだそうです」

コンブの減少は魚の減少へと連鎖することから、その対策が検討された。そこで導入されたのが「ビバリー@ユニット」だった。

「鉄鋼スラグはコンブだけでなくサンゴにも有効だそうで、小さく

生えているのを見ることができました。これほど効果があるのなら「たくさんのスポットに設置すればよいのでは？」と思うのですが、海によって成分が有効な条件が異なるのだそうです。とても不思議で、すごく勉強になりました」

水上から海を知る。その海を、製鉄の副産物が再生する。人生と環境、そして科学の不思議を通じて彼女が意識を新たに唱えるのは「当たり前前」の重要性だ。「何でこんなところにまで？」という場所、度々ゴミを目にします。海を訪れたらゴミを持ち帰る。飲料の瓶や煙草の吸い殻を海に捨てない。そしてサンゴを勝手に持ち帰らない。まずはそんな当たり前のことを、特に私たちがのような若い世代が気をつけなければならぬのだと思いました。海だけではなく、日常生活でもきつと同じはず。そういった意識が、何年後かの環境を大きく左右するのではないのでしょうか」

一人の経験と想いが、時に多くの人々へと拡散する。彼女の言葉はキャスターの説得力を備えている。「また沖繩の海へ。戻りたい」。彼女はそう言うとき大きくて爽やかな笑顔を咲かせた。

浅田舞 一九八八年愛知県生まれ。フィギュアスケーター。二〇〇三年、二〇〇四年世界ジュニア選手権四位、二〇〇六年四大陸選手権六位。現在はアイスショー等に出演するほか、スポーツキャスターとしてテレビ、新聞等でも活躍中



ダイビング撮影 ©尾崎たまき



再生した青森の海で 自然の神秘を体感した

青森県・下北半島の風間浦村易国間の海に潜った浅田。深刻な環境問題となっている「磯焼け(沿岸に生えるコンブなどの海藻類が枯れる現象)」の状況を目の当たりに。岩場にはコンブを食べ尽くしたウニがびっしり。また、近年、環境再生資源として注目が集まる「鉄鋼スラグ」の活用によって、コンブが再生した様子も観察。たくましく生い茂るコンブの大きさに驚いた

